

2019年3月13日

学位請求者 佐野 直子

論文題目 ひとつの〈言語〉の途上で——「少数言語」オクシタン語の脱近代

論文審査委員 糟谷 啓介

安田 敏朗

赤嶺 淳

## 1. 本論文の構成

本論文でとりあげられる「オクシタン語 (l'occitan)」とは、ロマンス語に属し、南フランスを中心にイタリアとフランスの一部にまで広がる地域で用いられている(いた)言語である。12世紀から14世紀にかけて、オクシタン語はトルバドールによる恋愛抒情詩を生み出し、文化的最盛期を迎えるが、アルビジョワ十字軍による壊滅的打撃の後、北フランスの王権の伸長により衰退の道に追いやられる。その結果、フランスの中央集権的な体制のもとで、オクシタン語は近代的な〈国語〉への道から脱落した「少数言語」としてのみ存在が許されることとなり、その一体性や「言語」としての存在そのものまでが不安定なものとなる。第二次世界大戦後の地域主義の運動は、地域の少数言語が、支配的な〈国語〉に抵抗しつつ、〈国語〉と同じように「言語—領土—国民」が一体となった〈言語〉への昇格を目指すものであったが、少数言語の存在のあり方そのものがそうした「近代的」なモデルを受け付けられないことが次第に認識されるようになると、少数言語の話し手は「脱近代」の言語運動を目指さざるをえなくなる。それは近代的な「言語そのもの」と異なる新たな「言語」の理念を打ち立てる試みでもある。本論文はこのような問題意識のもとで、少数言語にとっての「言語」概念とはなにかという理論的な問いに取り組むと同時に、著者のフィールドワークに基づくデータを通じて、現実のオクシタン語の使用状況をあがままにとらえようとする野心的かつ冒険的な企てである。章の構成は以下の通りである。

## 序論

0.1 「語るという事実」と社会言語学

0.2 非・存在の「言語」:「オクシタン語」という事例

0.3 本論文の構成と研究方法

## 第一部 言語記述の可算性と多層性

### 第1章 〈国語〉のヨーロッパ近代

1.1 言語の可算性という問い

1.2 錯綜する言語への視点

1.3 〈国語〉の矛盾と破綻

1.4 「諸〈国語〉の時代」の完成か、終焉か

### 第2章 社会言語学における研究対象としての〈言語〉

2.1 フランス共和国憲法の二種類の言語

2.2	社会言語学の誕生
2.3	「少数言語」の誕生
2.4	多言語社会における「少数言語」
2.5	社会言語学的記述における二種類の〈言語〉
第二部 「オクシタン語」の社会言語学	
第3章	「パトワを話せ！（Parla patoés!）」：「少数言語」の可視化
3.1	はじめに：「オクシタン語社会言語学」というカテゴリー
3.2	不可視の〈言語〉のフィールド研究
3.3	アヴェロン県の調査
3.4	おわりに：「特別な場所」の「闘争者」たち
第4章	〈言語〉の「文法」：イタリアにおける「オクシタン語」の生成
4.1	はじめに：多言語国家イタリアの「言語的マイノリティ」
4.2	イタリアオクシタン谷のインタビュー調査
4.3	おわりに：〈言語〉の「文法」
第5章	「特別な場所」の継承
5.1	はじめに：「十全な話者」とは誰か
5.2	「言語シフトを巻き返す」研究における学校教育の位置づけ
5.3	フランスにおける「少数言語」の教育運動
5.4	教育実習生のライフヒストリー調査
5.5	おわりに：欲望の支柱としての「それ自体としての言語」
結論：〈言語〉の途上で	
6.1	社会言語学的記述の特徴
6.2	調査者の当事者性
6.3	〈言語〉を書くこと、記述すること
参考文献	
謝辞	

## 2. 本論文の概要

序論においては、本論文の全体をささえる問題意識が述べられる。著者は二つの問題系を重ね合わせるかたちで本論文の主題を設定しようとする。ひとつは学問としての社会言語学言語学の認識論と方法論であり、もうひとつは「少数言語」としてのオクシタン語の存在様式である。著者によれば、社会言語学は近代言語学が措定した「それ自体としての言語」という考え方を批判し、人間の「語るという事実」に肉薄しようとしたが、社会で話される多様なことばを「〇〇語」として名付けた途端、近代的な〈国語〉のモデルを密輸入し、しかもそれに無自覚である状態が生まれた。著者はこうした研究史をふまえ、あくまでも「語るという事実」に即した社会言語学的研究の方向性を確立しようとする。その一方、「オクシタン語」には、その名称や存在すら確定したものとみなされてはこなかったという歴史がある。著者の言い方によれば、それは「非・存在」としての「言語」であった。これらの点に関する批判的検討をふまえて、本論文では、「語るという事実」の現場から、話者のもとにある「オクシタン語」の存在を提示することが目指される。そして、著者が研究者として「オクシタン語」という言語名を提示しつつ、「オクシタン語」で問

いかけたとき、インフォーマントである話者たちが、「語るという事実」のなかでその〈言語〉をどのように立ち上がらせるのか、という言語実践そのものを対象とすることが明言される。

第1章では、「語るという事実」への視点を抑圧してきた近代ヨーロッパの〈国語〉概念が批判的に検討される。著者は、バッジオーニ（『ヨーロッパにおける言語と国民』）の「第一次エコ言語革命」「第二次エコ言語革命」の図式を手がかりにしながら、フランス革命からドイツ・ロマン主義にいたる近代的言語観の流れをたどりなおす。著者によれば、フランスとドイツではたどった道筋が大きく異なるものの、「区切られ名付けられる可算的な全体」として〈国語〉が措定された点では同様である。こうして19世紀半ば以降、〈国語〉「それ自体としての言語」「国家-言語」「語るという事実」という錯綜する系列が、たがいに依存しながら矛盾を隠蔽することによって、「国民国家による舗装工事」（バッジオーニ）がヨーロッパ全土で進行することとなった。

第2章では、社会言語学の研究対象としての〈言語〉の特徴が、研究史をふまえて考察される。第二次世界大戦後、近代言語学が措定した抽象的な「それ自体としての言語」という把握に対して、生きた社会の現実のなかで用いられる言語に対する関心が高まった。近代言語学が同質的体系としての〈言語〉に注目するのに対して、社会言語学は多言語状況をむしろ常態とみなし、一定の文脈のなかで発話として選択された項目の変異性と多様性に注目する。社会言語学が第一に立てるべきとしてフィッシュマンが立てた問い、すなわち「誰がいつ誰に対してどの言語を使うのか」は、そうした社会言語学のスタンスをよく言い表している。こうした社会言語学的〈言語〉は、従来の「それ自体としての言語」ないし〈国語〉概念と大きく異なっていたが、それらから完全に脱却できたわけではなかった。その一方、1990年代以降、「消滅の危機に瀕する言語」への注目が世界的に高まり、ユネスコをはじめとする国際機関による少数言語保護の動きが生まれた。こうしたパースペクティブのもとでとらえられる「少数言語」は「国家-言語」との共存を前提として存在するものであり、その保護政策が検討される過程で、従来の〈国語〉概念は解体し、〈国語〉のもとに包摂させられていた「それ自体としての言語」「国家-言語」「話すという事実」がそれぞれ分離していくことになった。

第二部では「オクシタン語」の社会言語学」と題され、著者のフィールドワークにもとづく研究成果が提示される。

第3章では、フランス南部のアヴェロン県の山間部の町で行った約30名に対するインタビュー調査を通して、オクシタン語が「可視化」されていく過程が分析される。1970年代から1980年にかけての「オクシタン語社会言語学」は、研究者自身が闘争的な当事者として、隠された「オクシタン語」を明るみに出すという目的をもっていた。しかし、その結果、可算的で単一的な「オクシタン語」の存在が話者自身からも否定されるという問題に直面した。こうした研究の反省をふまえ、著者はまったく別の問いを立てる。それは、インタビューという発話状況のなかに〈私〉が「よそ者」の研究者として現われたとき、「よそ者である私に誰がいつオクシタン語を話すのか」を問うことである。調査者である著者はもちろんのこと、インフォーマントにもいわゆる母語話者はいない。しかし、著者がオクシタン語で話しかけると、インフォーマントたちは積極的にオクシタン語で応答し、自分たちの言語が「オクシタン語」と呼ばれることやオクシタン語を使った教育機関があることなどを著者に熱烈に語るのであった。著者によれば、ここで話者たちは、「よそ者とパトワで話す」という「特別な場所」を保持するべく、積極的かつ意識的に協働しており、自ら〈言語〉を選択し、他者にも「オクシタン語」の使用を促す「闘争者」としてふるまっているとされる。

第4章では、イタリアのピエモンテ州にあるいわゆる「オクシタン谷 (Valadas Occitanas)」で約80名に対しておこなったインタビュー調査にもとづき、フランスとは異なるイタリアでのオクシタン語の状況が考察される。イタリアはファシズム時代の過酷な言語抑圧への反省から、1948年制定の共和国憲法において「言語的マイノリティの保護」がうたわれた。この措置の具体的な適用は長らく規定されてこなかったが、1999年の「歴史的言語的マイノリティ保護法」において、はじめて対象となるマイノリティの名称が列挙され、そこには「オクシタン語話者」への言及もあった。その一方、1960年代以降には、フランスとイタリアに共通する「オクシタン語」の存在についての情報は、国境を接するフランスからもたらされた。著者が調査をおこなった2003年から2004年にかけては、こうしたさまざまな流れの交錯のなかから、ときには互いに対立するような〈言語〉観が多様に共存する状況が生まれた。インタビュー調査で目立ったのは、インフォーマントが複雑で混濁的な言語使用についての正確な知識をもち、そのルールを調査者に説明する姿勢である。彼ら彼女らの多くは、調査者のオクシタン語に対して躊躇なくオクシタン語で返答し、発話のなかの言語項目の選択においても自覚的であり、それぞれの〈言語〉に対する強いこだわりをもつ。ここには「無意識に話す母語話者」というイメージからはかけ離れた話者の姿がある。インタビュー調査を通して確認された話者の規範的態度に関して著者は、「少数言語」の「規範文法」に何らかの社会的レヴエンスがあるとしたら、当該〈言語〉を使用する「特別な場所」を構築することを合意した話者たちが、それぞれがもつ破片ごとのマイクロな選択に現れる欲望を調整するときである、という結論をみちびきだす。

第5章においては、「消滅の危機に瀕する言語」としての「少数言語」の世代間継承に取り組む事例として、オクシタン語によるイマージョン教育を実施しているNPO団体「カランドレート (Calandreta)」で教える教員の養成機関「アプレーネセンター (Centre APRENE)」が取り上げられる。「カランドレート (オクシタン語で「ヒバリ」の意)」は1980年に設立されたが、2018年時点で、幼稚園・小学校が67校、中学校4校あり、2018年1月には初めての高校がモンペリエで開校した。少数言語の側から支配言語に対して「言語シフトの巻き返し」を進めるための指標としてフィッシュマンが立てた「段階別世代間断絶スケール (Graded Intergenerational Disruption Scale)」においては、当該言語の初等教育への導入を示すステージ4が大きな分水嶺をなしている。もはや「家庭」という私的セクターにおいて世代間継承が困難になりつつある少数言語においては、学校教育の役割がきわめて重要なポイントとなる。その意味で「運動としてのイマージョン教育」を推進する「カランドレート」の役割は大きい。著者が「カランドレート」のための教員養成機関「アプレーネ」に対する調査で明らかになったのは、カランドレートの教師でいわゆる「母語話者」はいないということである。彼ら彼女らは「教員養成システム」という「特別な場所」において、〈仕事〉の言語としてオクシタン語を積極的に使用し、その使用に対して強い熱意をもっている。著者は教育実習生へのインタビュー調査を通して、オクシタン語は日常的な「語るという事実」のなかで習得する言語ではなくなっているが、それを学びたいという欲望さえもてば、誰でも学ぶことのできる事が可能な形に整備されつつある、という。さらに著者は、現在、オクシタン語にとっての「それ自体としての言語」は、売買される「商品」として現れると論じる。オクシタン語教育と結びついた周辺で、さまざまな形での経済活動が生まれ、新たな生き残りの場所を提供しているとしたうえで、著者は、「少数言語」において世代を超えて伝達されるべきは「それ自体としての言語」の可算的な閉じた体系ではなく、「特別な場所」を構築し継承しようとする欲望であると論じる。

結論においては、「社会言語学的記述の特徴」「調査者の当事者性」「〈言語〉を書くこと、記述すること」の三点を中心にして、論文全体がまとめられる。そして、社会言語学的記述においては「それ自体としての言語」を体系的に話すような「母語話者」モデルはもはや意味をなさないこと、「少数言語」の存続にとって重要なのは話者たちの自覚的な協働によって「特別な場所」を作り出すことであること、調査者は社会言語学的な問いをたてて「語るという場所」に参加する話者として現れることが確認される。とりわけ著者が強調するのは、「オクシタン語」の話者たちが「よそ者」としての著者を拒まずに大歓迎してくれたことである。この点は、オクシタン語話者は外部の第三者の姿が現れると「恥」の感覚からオクシタン語を話すのを止めるという、これまで観察されてきた「事実」を明確に否定するものである。もちろんそこには、著者が現地の言語的支配関係に関与しない「よそ者」であった点が幸いした面がある。しかし、著者がすべてのインフォーマントとオクシタン語で話し、調査を一貫してオクシタン語でなしとげたという事実そのものが、「オクシタン語」の存在証明となっていると著者はいう。そして、著者の周囲にあったのは、話者たちの厚いネットワークと、この〈言語〉を使用しようとする欲望であり、それこそがオクシタン語という〈言語〉そのものであった、という結論が出される。

### 3. 本論文の成果と課題

本論文の成果は以下の点にある。

第一に、著者の関心は少数言語としてのオクシタン語にあるが、言語政策的な次元から少数言語に対する抑圧を問題にするだけでなく、近代ヨーロッパにおける〈言語〉観をふりかえり、その歴史の見取り図のなかで「少数言語」に対するまなざし、あるいは支配言語と少数言語の関係がどのように作られ変化してきたかを跡付けている点で、たいへん懐の深い議論となっている。とくに、「語るという事実」が「区切られ可算的な〈言語〉」へとどのように還元されていき、それが政治的・社会的にいかなる意味をもつに至ったかを論じる部分は刺激的である。著者独自の用語を駆使して繰り広げられる議論にはわかりにくさも残るが、社会言語学と言語思想史を結びつける議論として大きな学術的意味を有している。

第二に、オクシタン語の使用状況に関する実証的な調査にもとづいて議論を組み立てている点である。著者の観点の独自性は、オクシタン語話者が発する発話そのものの分析に向かうよりは、オクシタン語を「非母語話者」として話す調査者がオクシタン語で話しかけたとき、話者たちはどのようなオクシタン語を提示し、そこにどのような言語意識をもって臨むかという問いを立てたことである。そこでは「オクシタン語」という言語名そのものが争点となりうる。こうした調査を経ることで著者は、「少数言語」の現場における「調査者の当事者性」「話者＝闘争者」という認識にたどりつく。こうした把握は、オクシタン語研究のみならず、あらゆる少数言語研究にも適用可能なものとして大きな意味をもつ。

第三に、著者が現地でおこなった調査が忠実に文字化され、オクシタン語で行なわれる生き生きとした相互行為の例証となっており、それを通じて「母語話者による世代間継承」とは異なるかたちでのオクシタン語の存在のあり方——話者の欲望に支えられた言語——を浮かび上がらせたことである。言い換えれば、この論文そのものがオクシタン語の存在証明であり、オクシタン語を「非-存在」とみなす認識への行為遂行的な反証となっているとみなすことができる。

とはいえ、本論文にも以下のような弱点が見られる。

第一に、本論文における議論の前提として、1990年代から〈国語〉の体制にほころびが見えは

じているという認識があるが、この点が十分に検証されているとはいえない。たしかに、欧州評議会における「地域語少数言語憲章」や国際機関による「危機に瀕する言語」への取り組み、国家による「少数言語」の保護育成など、従来とは異なる方向性が見られるのは事実であるが、それは〈国語〉の体制の弱化ではなく、新たなかたちでの再編であるとも考えられる。また、議論の中心がヨーロッパ、とりわけフランスにおかれていることは、研究対象の設定から致し方ない面はあるとはいえ、やはり議論を制約した面があることは否めない。

第二に、著者がさまざまな独特の用語を用いて議論を展開することは評価できるが、肝心の〈言語〉の定義が複雑であるがために、著者自身の解釈にぶれが生じている点が見られる。とりわけ論文のタイトルである「ひとつの〈言語〉への途上で」という表現自体が、筆者の語ろうとしている論旨を正確に伝えきれていない点が悔やまれる。なぜなら、著者が「可算的な〈言語〉」という視点に批判的であるにもかかわらず、この題名だけを見るとオクシタン語が可算的な全体を目指しているかのように読まれてしまうからである。また、著者は「オクシタン語話者がこの〈言語〉を使用しようとする欲望」を「オクシタン語」という〈言語〉そのものとみなしているが、ここでの「〈言語〉そのもの」は、近代言語学が発見した「それ自体としての〈言語〉」とは当然のことながら次元が異なるはずである。しかし、言葉遣いだけからその点を読み取るのは難しい。著者の意図をより明確に伝えるような用語をさらに工夫してもよかったように思われる。

第三に、前半では「語るという事実」に着目して言語をみようとしているにもかかわらず、後半の具体的な分析にはいと、多数の話者のデータを「断片」化して（つまりどのような背景で語られているかを無化して）分析している点が、姿勢として一貫していないように思われる。たしかに、著者はオクシタン語が「言語の全体性」を確定しえない「破片としての言語」としてしか存在していないとみなし、「破片としての言語」としての在り方に少数言語の生き残りの戦略を見ている。そして、「破片としての言語」を「言語以下」のものとみなす見方そのものが、近代言語イデオロギーの根幹にあることに間違いはない。しかし、「破片」であるからこそ、発話それ自体を多様なコンテキストから独立したものとして抜き出すことができないことを強調すべきではなかっただろうか。

第四に、本論文は社会言語学のみならず、フランス地域研究の作品として幅広い読者に迎えられるべき価値をもつが、フランスないし南フランスの状況が暗黙のうちに前提とされるため、叙述がわかりにくくなっている箇所が見られる。当該地域の事情に通じていない他地域の研究者にも理解されるような工夫がさらにあればよかったように思われる。

しかし、上記のような問題点は著者自身もよく自覚しており、本論文の学術的価値を損なうものではない。本論文は深い理論的考察と著者自身の長年におよぶ実証的調査にもとづいた優れたオクシタン語社会言語学の研究として、少数言語研究者のみならず、あらゆる言語研究者の関心を引くものと思われる。

#### 4. 結論

以上のことから、本論文が学位論文に値するすぐれた研究であると認められ、著者に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考えられる。

## 最終試験結果の要旨

2019年3月13日

学位請求者 佐野 直子  
論文題目 ひとつの〈言語〉の途上で——「少数言語」オクシタン語の脱近代  
論文審査委員 糟谷啓介 安田敏朗 赤嶺 淳

2019年2月22日、本学学位規則第8条第1項に定めるところの最終試験として、学位請求論文提出者 佐野 直子 氏の博士学位請求論文「ひとつの〈言語〉の途上で——「少数言語」オクシタン語の脱近代」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、佐野直子氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって審査員一同は、一橋大学博士（学術）の学位を授与されるに必要な研究業績および学力を佐野直子氏が有することを認定し、最終試験での合格を判定した。